

国際理解・国際協力のための  
作文・感想文コンテスト

2019

# 優秀作品集



日本国際連合協会山口県本部

## 序

国際連合(国連)は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在 193 ヶ国が加盟し、日本は昭和 31 年(1956 年)に加盟しました。

山口県では、昭和 27 年(1952 年)に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。

今年度の、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただき、その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部

本部長 加登田 恵子

### <日本国際連合協会山口県本部について>

#### 主な活動内容

- 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- 各種コンテストの開催
  - 「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
  - 「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」
  - 「外国人による日本語スピーチコンテスト」

#### ホームページ

<http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト2019  
優秀作品集目次

中学生の部 第59回 国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト

- ◆ 特賞（山口県知事賞）  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
高水高等学校附属中学校 2年 吉村達也 2
- ◆ 特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
～アメリカでのホームステイを体験して～  
下関市立勝山中学校 3年 河野莉彩 4
- ◆ 優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
美祢市立厚保中学校 1年 安部晃大 6
- ◆ 優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
～この世界に足りない心～  
周南市立熊毛中学校 2年 倉増隼斗 8
- ◆ 特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）  
『性別に関係なく、一人ひとりが輝く国際社会の実現に向けて  
自分には何ができるか。』  
下関市立勝山中学校 3年 安田薫 10
- ◆ 佳作  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
～偏見は身近から～  
下関市立勝山中学校 1年 伯川心音 12
- ◆ 佳作  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
～違いを認める～  
下関市立文洋中学校 2年 徳久優花 13
- ◆ 佳作  
『性別に関係なく、一人ひとりが輝く国際社会の実現に向けて  
自分には何ができるか。』  
山口市立平川中学校 2年 伊藤純 15
- ◆ 佳作  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
山口市立平川中学校 2年 梅本千里 16
- ◆ 佳作  
『違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。』  
山口市立平川中学校 2年 三浦溪太郎 17

## 高校生の部 第1回 高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト

- ◆ 特賞（山口県知事賞）  
SDGs④：質の高い教育をみんなに  
『質の高い教育のために』  
サビエル高等学校 2年 米澤 貴代香 19
- ◆ 特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）  
SDGs⑥：安全な水とトイレを世界中に  
『水不足の深刻さ』  
高水高等学校 1年 松本 彪 21
- ◆ 優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）  
SDGs②：飢餓をゼロに  
『食べられるのはあたりまえ！？』  
高水高等学校 1年 河戸 明愛 23
- ◆ 優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）  
SDGs⑪：住み続けられるまちづくりを  
『住み続けられるまちとは』  
山口県立萩高等学校 1年 市川 怜那 25
- ◆ 特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）  
SDGs④：質の高い教育をみんなに  
『世界中の子どもが同じ教育を』  
高水高等学校 1年 上杉 美優 27
- ◆ 佳作  
SDG①：貧困をなくそう  
『貧困をなくすために』  
山口県立萩高等学校 2年 小田 穂乃佳 29
- ◆ 佳作  
SDG⑭：海の豊かさを守ろう  
『海の豊かさを守ろう』  
山口県立萩高等学校 1年 小林 ゆり 31
- ◆ 佳作  
SDG⑭：海の豊かさを守ろう  
『海のために知るべき・すべきこと』  
山口県立萩高等学校 2年 廣兼 颯哉 33
- ◆ 佳作  
SDG③：すべての人に健康と福祉を  
『誰かの心の支えになりたい』  
山口県立萩高等学校 1年 弘中 竜也 35
- ◆ 佳作  
SDG①：貧困をなくそう  
『私達にできること』  
山口県立萩高等学校 1年 古谷 茉莉 37

第59回

国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト



優 秀 作 品 集

## 特賞(山口県知事賞)

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

高水高等学校附属中学校 2年 吉村 達也(よしむら たつや)

私は、国際理解・国際協力で違う価値観を持つ人と共存するためには、母国のことを理解し、他国に母国のことを伝えるということが必要だと思います。

まずは、母国がどのような国でどのような歴史を辿ってきたのかを理解・知ることから始めなければならないと思います。これをするためには、母国に昔からある伝統行事に参加をしてみたり、歌舞伎や狂言などの伝統芸能について勉強をしたり、観てみたりするなどこのようなことをするのがいいと思います。さらに、私は、部活動で茶道部に入っています。そこで、茶道を通して、日本の伝統文化を学び、そして母国のことを理解していきたいと思っています。このように、国際理解・国際協力をするための始めの一大歩は、様々な体験などを通して、どのように母国が今までこの世界を歩んできたのかを理解することだと思います。

母国がどのような国であるのかを理解することができたら、次に他国に母国のことを伝えるということが重要だと思います。これをするためには、まず、他国の人と会話をする必要があります。だから、英語を学ぶことがとても重要で大切です。僕は今、茶道部だけでなく、英会話部にも入っています。英会話部では国際理解・国際協力に必要な英語を学んでいます。そこで、コミュニケーション能力を高めて、他国の人ともきちんと会話をできるようにしようと努力をしています。僕がこの英会話部に入ろうと思ったきっかけは小学五年生のときに広島原爆ドームで他国の人に話しかけられたときです。僕はその時英語も話すことが出来なかったのでコミュニケーションを取ることが出来ませんでした。だから、英語を話せるようになって母国の人だけでなく他国の人とも会話をしたいと思いました。そして、僕は英語をきちんと話せるようになり、他国の人に母国の文化などを伝えてみたいです。これからも英語の勉強をがんばります。

そして、英語を話せるようになったら、他国の人ときちんと会話ができるので母国のことを他国に伝えることができます。けれど、母国のことだけを他国に伝えても国際理解・国際協力は出来ません。なので母国のことを伝えるということだけでなく他国のことに興味を持って他国のことを知ることが必要だと思います。このように、自分の意見や母国の文化などを他国の人に伝えて、他国の意見などを聞いて他国のことを知ることによって国際理解・国際協力をし、共存をすることが出来る

と思います。僕は、これから他国のことに興味を持ち、ニュースや新聞などのメディアを通して他国のことを少しでも理解したいです。しかし、これだけでは完璧に理解することは出来ないと思うので英語の勉強をきちんとし英語を話せるようになって、実際にその他国の人と会話をして理解を深めてみたいと思います。

他にも、他国の人と一緒にスポーツをするなどをして交流をしたり、実際に他国に行くような留学などを通して国際理解・国際協力をするのもいいと思います。ユニセフの募金などで発展途上国などに寄付をするなど小さなことでも国際協力になり、人を助けることができるのでとても大切なことだと思います。このように、どのようなことでも国際理解・国際協力ができるので慈善活動をするように僕も今まで以上に心がけてやっていきたいです。

最後に、国際理解・国際協力で違う価値観を持つ人と共存するためには、母国の伝統文化などを体験し、母国の理解を深めて、その母国のことを伝えるために英語を学び、習得し、他国に母国のことを伝え、さらに、他国のことも興味を持って、他国のことを知ることが重要だと思います。さらに、色々な慈善活動に参加して、人を助けることも重要だと思います。

**特賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)**  
**違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。**  
**～アメリカでのホームステイを体験して～**

下関市立勝山中学校 3年 **河野 莉彩** (かわの りさ)

価値観は、人それぞれである。たとえ同じ家族であっても、価値観が違うことだ  
ってある。さらに海外へ、となると、もっと違ってくるだろう。文化も異なると、  
考え方もまた変わってくる。そう実感したのは、今年の夏、初めてアメリカに行っ  
たからだ。価値観が同じ人に出会えるのは、逆に珍しいのかもしれない。

小学生の頃、月一回ある、「子供生け花教室」に参加していた私は、中学生にな  
って、本格的に生け花を習い始めた。生け花には、流派があり、私はその中の「小  
原流」という生け花を習っている。そして、いつか私の習った生け花がどこかで生  
かすことができたらいいなと思っていた。そしてチャンスは巡って来て、私はこの  
夏、アメリカへホームステイに行く機会に恵まれた。ホームステイの話を生け花の  
先生に話すと、

「アメリカにも小原流があるから、ぜひ生けていらっしやい。」

と言われ、オアシスを準備してくれた。ありがたいなと感謝しつつ、「小原流」  
を背中に背負って、アメリカへと渡った。

私の話す英語が、ホームステイ先の家族に伝わるか心配だったが、なんとか通じ、  
花屋さんに連れて行ってもらい、花を購入することができた。そこには、日本にも  
あるバラやソリダスターなどがあり、それらを購入して、家に帰って早速生けた。  
ホストファミリーの彼女らは、とても喜び、写真を撮ってくれた。異文化を受けて  
くれて、私は嬉しかった。話をしていくうちに、彼女たちのおばあちゃんが、日本  
文化がとても好きで、畳のベッド、着物、生け花も経験したことのある人だと分か  
った。日本の文化が国や人種を越えて繋がりあった瞬間だった。

また、私はホストファミリーに浴衣や甚平を持って行った。おばあちゃんの家には、  
着物が飾られていたが、実際、自分のものとして手を通すのは初めてのようで、  
目を輝かせながら着ていた。表現豊かな彼女たち、特にママは満面の笑みで喜びを  
表現してくれた。その笑顔は、とても輝いていて、今でも私の心に残っている。近  
いうちに、「ジャパニーズフェスティバル」があると聞き、彼女たちは、ぜひ、浴  
衣を着て参加したいと言ってくれた。後日、ホストファミリーから連絡があり、生  
け花の写真を送ってくれた。また、プレゼントした浴衣や甚平も来てくれたそうだ。



日本文化を楽しんで受け入れてくれていることが、とても嬉しかった。

価値観の違う人同士が、生活を共にするという事は、大変なことだと思う。ましてや、ホストファミリーになるということは、相手の国を認め、生活や文化、習慣を受け入れなければならない。自分の価値観を押し付けるのではなく、相手を認めながら、共有できるところは共有し、そうでないところは理解し合うことが大切だと思う。そうすることで、お互いの価値観を気持ち良く受け入れることができると思う。

世界には、さまざまな国がある。私がこうしていろんな体験ができたことは、知識や学問を身につけるために学校に通うことができているからだ。また、世界には、生活することがやっとなら、学校に通えない子供たちがたくさんいることを忘れてはならない。そのために私が今できることは何か、日本が世界に向けてできることは何かを考えなければならない。そして、改めて日本を見つめ直すことの大切さを痛感した。

価値観は人それぞれ。だからこそ、自分の考えを押し付けず、相手の考えを否定せず、聞き入れることが大切だと思う。価値観は、変わることもあるかもしれない。いやその逆で、ずっと変わらないこともある。お互いの価値観を理解し合うことによって、自分の世界も広がり、自分の思考も変わるかもしれない。もし、相手の価値観に納得しない自分がいたら、一度、心の中で考えてみたい。

**優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)**  
**違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。**

美祿市立厚保中学校 1年 **安部 晃大**(あべ こうだい)

宿題のテーマをもらってこのことについて真剣に考えたことはありませんでした。テレビを見たり、新聞を読んだり、兄弟で話したりして、少し興味が湧いてきました。

僕は、英語の勉強ができる人と英語の勉強ができない人には、違う価値観があると思います。

僕は、学校の授業でALTの先生と話す機会があります。英語の勉強ができる人は、どんどん理解することができて進んでいくから、楽しいと思えるけど、英語の勉強ができない人は、理解することができなくて、進みがおそいから楽しくないと思ってしまうことがあると思います。

なぜ、勉強ができる人が楽しいと思えるのかということ、とくに英語の勉強ができる人は、理解が進むことによって外国の人と話せるという楽しみがあると思うからです。また、次の楽しいことを知りたいと好奇心が出てくると思うからです。さらに、勉強ができない人に教えることによって、もっと理解が深まります。

一方、英語の勉強ができない人が、楽しくないと思ってしまうのかということ、単語や文法などがなかなか覚えたり、理解したりすることが難しいからだと思います。そのことによりいやだという気持ちが心の底から出てきてやる気が無くなってきてしまうからだと思います。

僕は英語の勉強があまり得意ではないので英語が好きではありません。そのため、ALTの先生が来られてもあまり話せません。だから、このまま外国に行ってしまうと、僕は何もすることができません。僕は、一度で良いので、将来アメリカに行きたいと思っています。行きたい理由は、僕は映画が好きなのでハリウッドに行ってみたいと思っているからです。また、アメリカのサイズ感が日本とは全く違います。だから、大きいハンバーガーやポテトを食べてみたいと思ったからです。

アメリカは、英語圏です。だから必ず英語が必要です。せっかくアメリカに来たのに、意思疎通が図れなかったら、旅行を楽しめません。

テレビのテレ朝でイッテQという番組があります。その中に、芸人の出川哲朗さんのコーナーに出川イングリッシュというのがあります。そこで出川さんが失敗を恐れず、文法はデタラメでも知っている単語をつなぎ合わせて、目的地へ向かっています。だから、僕もきちんと英語を話せることが一番だけど、最低限、単語の知

識と勇気を持ってアメリカへ行きたいです。

そのためにも、僕自身が英語を楽しいと思えるようにならなければいけません。生活する上で、日常生活で英語をたくさん目にする機会があります。勉強で、全て学んでいくのではなく、生活の中からも学んで行きたいと思います。

今の外国と日本の関係は好調とはほど遠いものだと思います。だから僕は、日本全体が外国とコミュニケーションを取ることが大切だと思います。

大人になった時に、会社に入ったら、外国に転勤することがあるので、その時にこうかいしないようにしたいです。

## 優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

#### ～この世界に足りない心～

周南市立熊毛中学校 2年 倉増 隼斗(くらまし はやと)

——この世界で人類全員が共存するのは、ほぼ不可能だ。

恐らく、世界中の大半の人々がこのように思っているだろう。世界中の大半の人々に自分が質問したわけでもないが、そう思ったわけは、主に二つある。

一つ目は、差別が存在しているからだ。差別は人を殺せる凶器にもなる。例えば、あるクラスに一人だけ、特別な個性を持った子がいた場合、周囲の人は、その人を「変人」と呼び始め、少しずつ差別されていく。そして自分たちも差別しないと、今度は自分が差別されるのではないかと、差別はさらに激しくなり、最終的には、差別された人は独り……。このことを、世間は俗に「いじめ」という。いじめがその人に不幸な結果をもたらすというニュースは残念なことに、少なくない。差別がこのようなことへつながるなら、確かに人類全員が共存するのは難しいのかもしれない。

二つ目は、戦争が今でも起こっているからだ。日本は、戦争をしないと宣言している。しかし、あくまでもそれは日本のみ。少し他国に目を向ければ、戦車が道を走っている。大切な人を失い、泣き叫んでいる人々の姿がある。これが今の世界での現実だ。戦争は、国などの団体同士が対立して起こるもの。同じ人類同士が対立するものなら、共存の夢はあって無いようなものだ。

この二つがなくなれば、人類は共存できると思う。では、この二つの共通点は何かと考える。それは、二つとも命につながるということだ。差別が原因でいじめが起き、そのいじめが進行した結果、自殺してしまう。戦争により、人々の命が消えていく……。このことから、自分は、二つとも命を失わせることが共通点だと主張する。

では、命について人々はどう考えているのだろうか。自分は、「大切なもの」という一言では表すことができないと思うのだが、意外にもその一言で済ませている人々が多い。ましてや、「命よりも大切なもの」とまで言う人もいる。それを例えているならいいと思うのだが、本気で言っているなら、違うと思う。命があるからこそ生きていられているのに、生きることよりも大切なものが存在しているとする。それは、生きていることを否定しているように思う。世界中では、生きたくても生きることができない人々もいるのに、そんな自由なことを自分は言えない。

この話は、ある日、幼馴染に紹介されたことから始まった。幼馴染はトイレへ自分を連れてくると、トイレにかけてある額縁を指さして言った。

「これ、読んでみて。」

自分は返事をして、額縁の中に書いてある詩を読んだ。タイトルは、『あたりまえ』だった。その詩の内容は、笑ったり、泣いたりできること、親がいることはあたりまえなのだが、とても幸せなことだ、ということだった。そして一つ、強く心に残った文がある。『そのありがたさを知っているのは、それをなくした人たちだけ。』これには、深い意味があるということはすぐにわかった。自分にとって、『あたりまえ』なことを自分はありがたいと思えたことはない。失って初めて気付くものがあるということを、この詩は教えてくれた。

今の日本国で大きな差別や戦争がないということは、あたりまえではなく、幸せなことなんだと、あの詩が自分の心に訴えてくれた。今の世界はあたりまえなことに全く感謝していないと思う。

自分は、あたりまえなことをありがたく思う心がこの世界に足りていないんだと思う。面白いことがあったら笑えて、それに共感してくれる仲間がいてくれて……。このことをありがたいと思った人が何人いるのか。今を生きることがありがたいとお互い思えば、差別や戦争もゼロへと近づくのだろう。

## 特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

### 性別に関係なく、一人ひとりが輝く国際社会の実現に向けて自分には何ができるか。

下関市立勝山中学校 3年 安田 薫(やすだ かおる)

男性、女性。私はこの一つの違いによって生活を制限されるべきではないと思っています。女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく私は今まで大人たちにそう言われて育ってきました。でも小さいころの私には、女の子らしく男の子らしくということがどういう基準で決められているのかよく分かりませんでした。だから、おままごとをするときも男の子がお母さんをやっても女の子がお兄さんをやってもちっともおかしいとは思いませんでしたしそれを楽しいとも思っていました。子どもに性別はありません。「一人の子がそこに存在している。」これだけを教えるのはいけないことではないと思います。

私は今年の七月アメリカに行きました。そこではみんながとても自由で「個性」を大切にしているように感じました。男の人がスカートをはいていても、女性がボーイッシュな格好をしても誰もとがめなければ変な風にも言いません。それは「規則」が厳しい日本にはないものでした。個性を認め合うことはとても大切なことだと思います。そして自分の性を自分で決められる社会を築くことも暮らしやすい社会を築くうえで大切な一つの要素だと感じています。

今日本では、戦前から残る男女間のこうあるべきという固定概念に悩まされている人が多いと思います。女性の育休制度も見直しはされましたが、結婚妊娠を機に家庭に入る人が多いのも仕方ないことなのかなと思ってしまいます。これを仕方ないですませないためにはどうするべきなのでしょう。

私は男性も女性も生きていくうえでカタチなどないと理解することこそが、一人ひとりが輝ける国際社会を築くうえで、最も大切だと思います。生きてゆくのに、カタチなどないと思います。女性は女性らしく生きる、男性は男性らしく生きるという考えを払拭すべきです。本来国連の憲章の中に「すべての人間は生まれながらにして自由でありかつ、尊厳と権利において平等である。」と記されています。これは人間は自由であり、人間は尊敬しあえる仲であるべきでありいつも平等でなければならないということを私たち人類に教えてくれているのだと思います。

私の好きな言葉の中にトーベ・ヤンソンの「イヌだのネコだのって。なにがすきって気持ちこそ大切なのに。」というものがあります。トーベ・ヤンソンはムーミンを描いた女性作家でしたが、彼女はバイセクシャルでした。好きという気持ちを大切に

している彼女の言葉はとても温かくて優しい気持ちにさせられるものばかりです。私は男性女性以外にもLGBTQの活動がもっとさかんになって欲しいと思っています。彼らはストレートの人たちと何も変わりありません。少し自分の性に対して違和感を持っているだけで彼らもLGBTQという立派な性別を有している人たちだと思います。だから彼らの就職や生活を制限してはならないし、彼らの生活を認めることが大切だと考えています。私もアメリカでレスビアンの高校生に出会いました。でも彼女はおもしろくて可愛くてすばらしい人でした。日本のことも好きだとも言ってくれました。私にはそんなにもすてきな彼女をマイノリティーだからといって軽蔑することなどできません。LGBTQは正常です。私たちの方が上と、性的マイノリティーを否定してはいけないと思います。

人生のカタチを決めつけてはいけないと思います。人間は自由で平等であるべきです。女性だから男性だからLGBTQだから、固定概念は危険です。人生のカタチは人それぞれでいいと思います。みんなそれぞれ違う人間なんだから違う人生がたくさんあったらおもしろいと思います。そのようにみんながそれぞれの人生のカタチを認めるようになったらみんなが作りやすい社会を築くことができるはずです。個人を尊重していくことこそが私の考える国際協力です。

## 佳作

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

#### ～偏見は身近から～

下関市立勝山中学校 1年 伯川 心音(はくがわ ここね)

時をさかのぼること約一ヶ月一。私は山口県の代表校として、中国から来られた方との交流を行いました。私が思っていた感じとは違い、とても礼儀が正しく、優しくてとても好印象でした。

私達が暮らす国、日本では中国の方は常識を知らない、公共のものや歴史ある建造物に落書きやイタズラをする迷惑な厄介者など中国をあまり良く思わない人が日本にはたくさんいます。そしてその様な迷惑行為をしている人は事実にもいますが、その一方で礼儀をととても大切にしている人が大勢います。

私達は中国に限らず、様々な人種に対しての偏見を持っているのではないのでしょうか。日本も他の国からすると、「冷たい」、「他人に無関心」など一部の間違っただけの考えが他の人達にとって、悪い印象を持たせているのだと思います。

また、そのような偏見によって地域差別が起こっている場所もあります。その差別によって実際に受けられるはずの「教育」を受けることができなかつたり、受けられるはずだった権利を受けられることが実際にできなかつたりする場所もあるということを知りました。

私達も論外ではありません。日本にも偏見が存在していると思います。私が思うのは血液型です。A型は真面目で誠実だとか、優柔不断とか、あの人は何型だから私とは性格が合わないだとか、ということは身の回りにも起こっているように感じます。これも偏見。

今の私達は人の一部だけを見て判断していると思います。そのような偏見での差別が激しい場所に募金するのも一つの手だと思いますが、直接解決する訳ではないと思います。私の考えとしては、「身の回りから行動を起こしていく」ということです。このような考えのもととなったのがマザー・テレサの名言です。「日本人はインドのことよりも、日本のなかで貧しい人々への配慮を優先して考えるべきです。愛はまず手近なところから始まります。」と。私は偏見があるのは、人々を愛することができないからだだと思います。だから間違っただけの偏見を少しでも減らすために、家族をはじめ、友人、親せきなど、一人一人が身の回りの人を愛していくことが重要だと思います。

これから私が成長していく上で「愛」は忘れません。

「愛はまず手近なところから始まります。」



## 佳作

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

#### ～違いを認める～

下関市立文洋中学校 2年 徳久 優花(とくひさ ゆうか)

私たちは、たくさんの人と関わりながら毎日を過ごしています。今まで誰とも関わらず生きてきた、という人はほとんどいないでしょう。例えば、トマトが消費者に届くまでには農家の人、運送する人、販売する人など、たくさんのお仕事の方が関わっています。このように、人との関わりが必要となる今、どんなことを大切にしていけば良いのでしょうか。

私は二つのことが大切だと考えます。一つ目は、誰でも違いがあることが当たり前と思うことです。私が通っている中学校では文化祭で合唱コンクールがあります。アルトパートのリーダーになった私は、大きい声が出ない人、地声になる人などたくさんの方がいて、まとめるのに困っていました。そんな時、ふと担任の先生がかけてくれた言葉を思い出しました。違いを認めるという言葉です。それまでの私は違いがあることを否定してしまっていたけれど、違いがあることは当たり前だと思うと心が軽くなり、それぞれにあったアドバイスがかけられるようになりました。また、メンバー全員が口が大きく開くようになり、合唱に対する思いも一つになっていきました。そして迎えた本番の時の歌声は非常にまとまっていた。残念ながら入賞はできなかったけど、クラスの合唱になったことが嬉しかった。十人十色という言葉があるように世の中には違う価値観を持った人がたくさんいます。それを自分の考えと比べて普通でないと思うのではなく、違うことが当たり前だと思っていきたいです。そして、人それぞれの価値観を認め、その人に合った思いやりのある声かけを意識したいです。また、合唱の練習を通して、違う価値観を持つ人と何かを作ることは難しいけれど、その分出来上がった時の喜びは大きいと感じました。世界に出たらこの考え方はさらに大切になってくると思います。手で食事をする国、宗教の進行が強い国、民族衣装がある国など、世界にはそれぞれの国の特色を持った文化や習慣があります。その違いを認め合うという気持ちを誰もが持てば、国どうしの戦争、政治の問題はなくなると考えます。そして、世界の誰もが自国の文化を大切にしながらも、他国の文化の良さを尊重していったら、明るく温かい世界になると思います。そんな世界が実現すれば、今世界で問題となっている地球温暖化などに向けて世界中の人が協力して動いていけるのではないのでしょうか。本当にあるべき世界というのは、こういう姿だと思います。

二つ目は、自分の考えを大切にしながらも、その場のルールやマナーに従うことです。例えば、ブラジルから日本に転校してきた女子がピアスを学校につけてきたとします。周りの人が注意をしたら、ブラジルでは産まれた時にピアスをあける習慣がある、と話します。転校生の国の文化を否定することはできませんが、一人だけを許してしまうと、他の人もアクセサリーをつけてくるかもしれません。郷に入れば郷に従え、ということわざがあるようにルールやマナーというのは、人々の考えや行動をまとめるためにあります。だから転校生は学校ではピアスはずし、家などの自分の空間ではつけるようにしたら良いと考えます。私も将来、他の地域や国に出ていくかもしれません。そんな時は自分の国に自信を持ち、その地域、国の約束を守るようにしたいです。そしていろいろな人の考え方を取り込んでいきたいです。

互いの価値観を認め合うことは当たり前のことだと分かっていたとしても、実際に行動うつせず争いや問題が起こっているのが世界の現状です。まずは家族、学校の仲間、地域へこの考え方が広まり、世界中の人々が意識して生活できたらと思います。そして、違う価値観を持つ人たちのそれぞれの考えを認め、一人一人が輝いて共存できる社会に早くしていきたいです。

## 佳作

性別に関係なく、一人ひとりが輝く国際社会の実現に向けて自分には何ができるか。

～国際問題について～

山口市立平川中学校 2年 伊藤 純(いとう じゅん)

私は、国際理解、国際協力をするためには会話を通して共通理解を図ることが重要であると考えている。

僕は、この1ヶ月間アメリカにホームステイをしてきた。アメリカでは、本当に小さい大きい関係なく一人一人が家の中で仕事を持っていた。あまり日本では、考えられない事だったのだ。

僕がホームステイをした家には、韓国人もいた。僕がホームステイに行く前の韓国人のイメージは、韓国人は、みんな日本人を悪く思っているという印象だった。実際に韓国人と会ってみると、僕を日本人であると同様関係なく韓国の文化などを教えてくれた。その他にも、キャンプなどの経験を通じて海外の人々の事を考える良いきっかけになったと思う。よって文化も習慣も違う人と協力し合って、違う価値観を持つ人々と共存するためには、その国の文化や習慣を十分に理解し思いやりを持って助けあうことが大切であると考えている。しかし最近では、多くの国々が自国の利益を優先する保護主義の流れが強まってきている。これは国際連合でも同じことが言えると思う。各国が、自国を中心に考えているため考えがまとまらず、国際平和に向けて有効な問題解決策を導き出すことができず機能不全に陥っていると考えられる。そこでもう一度、原点に立ち返ってそれぞれの国がお金だけで問題を解決しようとせず人と人との心のふれ合いによってお互いに共存し合っていくことが大切であると考えている。

## 佳作

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

山口市立平川中学校 2年 梅本 千里(うめもと せんり)

私は、違う価値観を持つ人たちと共存するためにはどうすれば良いかを考えることにした。理由は、人は一つのことでも一人一人思っていることが違う。例えば、犬で考えてみると、犬が好き、かわいいと思っている人もいれば、犬がきらいと思っている人もいるからだ。このように、一人一人違う価値観を持つ人と、どのように共存すれば良いかを考えてみたかったからだ。

違う価値観を持つ人たちと共存するためには、まず相手の意見を聞く。相手の意見を聞くことで自分と、どのようなところが相手と違った意見なのかが分かり、両方の意見を聞くことで両方の視点から物事を見ることができるので私は、相手の意見を聞くが良いと思った。相手の意見を聞くことと、もう一つ違う価値観を持つ人たちと共存するために必要なことがある。それは、自分の意見と相手の意見を合わせること。けれど、これは最初に例にだしたようなものはできない。でも、上手に利用することで良い結果になることがある。例えば、デパートだ。デパートは、外から見ると一つの建物だが、中には多くのお店が入っている。このように、二つの意見を合わせることも大切だと思った。

違う価値観を持つ人たちと共存するためには、相手の意見を聞くこと、自分の意見と相手の意見を合わせる事が大事だと思う。

## 佳作

### 違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。

山口市立平川中学校 2年 三浦 溪太郎(みうら けいたろう)

僕は、違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきかについて考えました。

価値観の違いとは、例えば、宗教や文化という大きな違いから、お金の使い方などの小さな違いまで様々です。それによって世界中で戦争や紛争が起こっています。それを止めるためには、すべての人が共存できる世界を作らなければいけません。その為にはまず相手を理解することが大切だと思います。相手の意見を認めようとせずに自分の考えを主張するだけではみんなの不満が募るだけだと思うからです。人それぞれの価値観があるということは人の数だけ価値観があるということです。相手の価値観を受け入れ、しっかりと話し合い、両方が納得できるルールを作るべきだと思います。

最近ではヘイトスピーチの解消に向けた取り組みが各地で進んでいます、しかしなぜそういった差別的な発言が無くならないのでしょうか。「悪意の心理学」という本を参考にしました。この本で僕が驚いたのは、女子高生が「信用金庫は危ないよ」と冗談を言ったという些細なことですが、それを聞いた別の友人が真に受け、話をしたことからそれが次々と広まったそうです。この事件は、友達に冗談を言っただけで、それがうわさとなり苦情やデマと同じような力を持ってしまうということもあるということを表しています。このように、意図的ではなくとも人を傷付けてしまうこともあります。

しかし、もし意図的に自分を傷つけようとする人が現れた場合、私達は、どうすれば良いのでしょうか。もし、その人が自分に対して何か偏見を持っている場合、その人の周りの人が正してあげるべきだと思います。そうでない場合では、一度第三者の視点から見て、本当に悪いのはどちらかを見極め、相手が自分にとって嫌なことを言ってきた場面は、すぐに激しい口調で反論するのではなく、なぜそう思ったのか、自分のどこがダメだったのかをハッキリさせておくべきだと思います。その上で相手に非はないのかどうかを判断し、自分だけではどうにもできない場合は、家族や友達などに相談することが大切だと思います。

違う価値観を持つ人たちと共存するためには、相手の考え方を理解、互いを尊重しあうルールを作っていくことが大切です。

## 第1回

高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト



優 秀 作 品 集

## 特賞(山口県知事賞)

### SDGs④: 質の高い教育をみんなに ～質の高い教育のために～

サビエル高等学校2年 米澤 貴代香(よねざわ きよか)

皆が質の高い教育を受けることができるようになるためにはどのようなことが大切だろうか。近年、これらについて世界から注目され、考えるべき問題としてあらゆるメディアで取り上げられている。

現在、世界で学校に通えない子どもの数は約6100万人といわれている。そして、大人の六人に一人が、教育を受ける機会を得ることもなく生活している。日本では、小学校・中学校の九年間が義務教育となっており、全ての子どもたちが教育を受ける権利を持っている。そもそもなぜ学校に通うことができない子どもたちがいるのだろうか。それは、発展途上国での高い貧困率や武力戦争、その他の緊急事態といった大きな課題に直面しているなどの理由からである。西アジアや北アフリカでは、武力戦争の長期化などが大きな原因となり、学校に通えない子どもの割合が増えている。これらの現状は私も以前から知っていたが、なかなか現実味を感じることができずにいた。しかし、この問題が拡大し、解決すべきことだと分かった今、改めて学んでみようと思った。

皆さんはマララ・ユスフザイさんとマズーン・メレハンさんという二人の女性を知っているだろうか。マララさんは女子が教育を受ける権利と教育の大切さについて、世界に訴えかけ、困難な状況下にいる女の子たちに勇気と希望をもたらした偉大な人物である。私は、中学三年生のとき、彼女が2013年に国連本部でスピーチしたものを元にしたスピーチをしたことがある。それらの内容の中で心に残っている言葉がある。それは一番最後にある「本とペンを手に取り、全世界の無学、貧困、テロに立ち向かいましょう。それこそ私たちにとって最も強力な武器だからです。一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが世界を変えられるのです。」という言葉である。この言葉で私は今どれほど恵まれた環境にいるのかを改めて知ることができた。世界には勉強がしたくても、できない子どもたちが沢山いるということを忘れてはいけない。日本は当たり前前に義務教育がされ、当たり前のように学校へ通うことができている。勉強できるということがどれほど幸せなことかをもう一度噛み締め、見直すことが私たちには必要なのではないか。私はマララさんの国連でのスピーチを聞いてそう強く思い、それまでに無かった教育に対する責任感を感じた。

そして、マズーン・メレハンさんとは、難民として初めてユニセフの親善大使に選ばれ、教育を受け、知識を得れば、生き続ける力となり、前向きな未来につながる、「すべての子どもたちに教育を受ける権利を」と精力的に活動している人物である。彼女は自身も難民キャンプで過酷な日々を送っていたのにも関わらず、テントを一件一件訪ね歩き、教育の大切さを伝え続けたようだ。教育を受けることで、知識が付き、その知識を生かし将来少しでも自分のためや他人の役に立ち、未来に希望を見いだすことができるような人になれるように訴え続けることは世界の子どもたちに勇気を与えることだと考えられる。同世代の二人がこのように活動をしていることを知って、とても感銘を受けた。二人から学んだことはこれからも忘れることはないだろう。

また、貧富の差も教育につながると思う。実際サハラ以南アフリカの初等教育就学率は1990年の52パーセントから2002年には78パーセントへと上昇しているが、大きな格差が残っている。最貧層世帯の子どもは、最富裕層世帯の子どもよりも学校に通っていない率が四倍高くなっているそうだ。このようなことから、貧富の差はより一層開くのではないだろうか。教育を受けれるということは職に就くということにも影響してくるはずだ。

なぜ質の高い教育を受ける必要があるのか。私にとってはまだ簡単に答えを出せることではないと思う。しかし、教育により世界が抱えている多くの問題を解決する手立てにはなるだろうと思う。幼い頃から教育を受けている私たちにとっては小さいことかもしれないが、世界の多くの子どもたちは受けられていないのであって、それらが改善すればより良い環境になることは間違いない。まずは、私たちがサポートすること。たった一つの言葉が彼らの支えになるかもしれない。そして学んだことを積極的に発信すれば質の高い教育を受けることのできる大きな一歩になるだろう。



## 特賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)

### SDGs⑥:安全な水とトイレを世界中に

#### ～水不足の深刻さ～

高水高等学校1年 松本 彪(まつもと たける)

「世界ではおよそ9億人が水不足に苦しみ、衛生的な水が得られないことが原因で、毎日4000人の子どもたちが命を落としていく——。世界を取り巻く水の現状は、知れば知るほど過酷で、目を覆いたくなります。(SDGsより)」

私はこの文章を読んで、今の世界の現状を目の前に突きつけられた。この現状を実際に見聞きしなければ、絶対に知ることはなかつただろう。そして私はその現状を知ると同時に、地球にある水についてもっと知りたいと思った。さらに、実際の世界の水の問題について考えたいとも思った。これを機に実際に考えてみた。

現在地球上にある水とは一体何なのか。太古の時代まで遡る。私たちの住んでいる地球は約46億年前に太陽系の惑星のひとつとして誕生した。地球は太陽系唯一の水が存在する惑星だ。それゆえ、水の惑星とまでいわれている。地球の面積の7割を水(海)が占めている。このようなことをいわれているものだから、人間は「嗚呼、地球って水がたくさんあるんだなあ。」と感じてしまう。では、そのうち利用できる水はどのくらいあるのだろうか。実は海水が98パーセント、淡水は2パーセント、その大部分は南極・北極にある氷山などだ。勿論海水や氷山は利用できないので、利用できる水は全体の0.01パーセントにも満たないのである。これは風呂桶いっぱいの水のうち、わずか一滴程度。とても小さい割合なんだと実感してもらえただろう。この一滴の水を人間は分け合って生きているのだ。しかし、この水が枯渇したり汚染されたりすると、すべての人間、いや、すべての生物が絶滅してしまう。つまり、水は生物にとってかけがえのないものなのだ。水の重要性を理解したところで本題に移る。

実際の問題について考えていこう。私は今世界の水問題を三つの分野に分けて考えた。地球単位の水問題、世界単位の問題、そして個人単位の水問題の三分野だ。それぞれの問題を三分野に分けて、私たちに取り組みする課題を考えてみる。まずは、地球単位の水問題。私が考える地球単位の水問題とは、砂漠や山脈などの気候や地形によって水不足であるという、いわゆるどうしようもないことである。そういった場所に住む人々は日々身をもって水の大切さを感じているのだから、水を無駄に使ったり、水資源を破壊したりすることはないだろう。この問題については深く考える必要はな

いと考える。

次に、世界単位の水問題。これは国やその人口がそれぞれ異なることによって、世界各地で水の格差ができてしまうという問題だ。この世界単位の水問題の具体例として挙げられるのは、国別の一人当たりの水資源消費量。私は以前国語の授業の際、このグラフを見た。すると、各国の一人当たりの消費量の差が顕著に表れていた。人口の多い国インド、中国（アメリカも匹敵しているのだが、ここでは二国について考える）が他の国々と比べものにならないほど一人当たりの消費量が多かった。この二国の急激に人口増加したという背景に着目した。急激な人口増加をする前は水の消費量は各国と比べてもそこまで多くはなかった。しかし、人口増加とともに、生活用水の消費が激しくなったのだ。この理由として考えられるのは、以前の暮らしぶりと大きく変化したということだろう。人々は食糧が足りなくなるという懸念をするあまり、（水は食糧よりは足りていると考えられているだろうから）水の使用量が他の国々と比較して多いとっている場合ではないのだろう。この問題がさらに深刻になる前に水の重要性について説いたり、国規模で節水を促したりして少しでも水不足改善に貢献したいものだ。

私たち日本も世界の中では消費量が多い方なので対策していきたいが、どのように対策するか。ここで、個人単位の水問題について考える。個人単位の水問題とは、人間一人ひとりが毎日の生活の中で水の浪費をしているということだ。この問題は三つの分野の中で最も小さな問題であり、かつ最も大きな問題だと私は考えた。世界の人口は現在約77億人、77億人が凄まじい力となる。そう、この力は小さいようで、とても大きい力なのだ。私はこの問題に対策することこそが水不足改善に一番繋がると思う。アフリカや南米、発展途上国では安心した水を手に入れることができない環境だ。だから、先進国の人々が日々の生活の中で積極的に節水すれば地球上の水を守ることに間違いなく貢献できる。

水問題は軽視されがちだが、地球上で最も深刻な問題だといっても過言ではない。冒頭の文章でもあったように、目を覆いたくなるような現状にどう向き合っていくかがこれから大事になるだろう。結局個人個人で水を節約することが一番効果的な水不足の改善方法だ。毎日少しでも節水に心がけていきたい。

## 優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)

### SDGs②: 飢餓をゼロに

#### ～食べられるのはあたりまえ！？～

高水高等学校1年 河戸 明愛(かわど めいあ)

今年の五月半ば、私はとあるニュースをみた。その内容はフードロスについてだった。

そのことを知るまでの私はフードロスについて知っている情報は昨年、当時高校二年生の先輩の、「高校生の主張コンクール」の作文を聞いたぐらいだった。先輩の話はとても深く、具体的な対策などを主張していたということが強く印象に残っている。

そのくらい少ししか知らなかったフードロスについて私はニュースを見て一つ思い出したことがあった。それは私が小学生の時のことだ。私はとても給食が苦手だった。いつも食べられることが当たり前ではないことは両親から何度も言われていたのに残すことは良くないと分かっているながらも六年間でとてもたくさんの給食を残してしまったことに後悔している。そんな私が思い出したことはランチルームにある青いバケツの事だった。これは残飯入れで給食が食べれなかった私はよくそこに給食を捨てていた。

ある日、私は担任の先生から、

「給食を作ってくくださる先生たちは青いバケツの中身が少なければ少ないほど嬉しくなるんだってー。」

ということを言われた。当時私は、その意味が全然分からなかった。給食の先生は青いバケツなんて、中身を捨てるだけだと思っていたからだ。

しかし、今思えば私は環境にも食べ物にも先生たちにも悪いことをしたなと思う。

話が少しずれたが、年間643万トンの食べられる食べ物が捨てられることを知ってもものすごくもったいないなと思った。

日本フードエコロジーセンターにはトラックが絶え間なく訪れ、コンテナの中には、原型のとどまった食パンやメロンパン、殻をむいたばかりのゆで卵や鮮やかなピンク色のハムなどまだ食べられるものが沢山あるということをニュースで知った。廃棄物なのに腐敗臭がしないということにも驚いた。それほど新鮮なんだということも

同時にわかった。

とくにコンビニや大手スーパーの期間限定で大量販売されるおせちや恵方巻き、クリスマスケーキなどの季節が近づくと、廃棄の量も増えるという。

『食品ロスを意識して賞味期限の近い商品を購入することがあるか』という質問を消費者庁が今年一月に問いかけ、3000人が回答した。というグラフを見た。

私はその質問を初めて見た時、「ほとんどない」という項目を選んだ。全体の回答は「よくある」が14.3%で「時々ある」が31.9%で「ほとんどない」が35.5%で「全くない」が18.3%と私と同じく「ほとんどない」と回答した人が多かった。

私の場合は無意識のうちに賞味期限が一番遠いのを選んでしまいがちである。

そんな大量に破棄される食品で、少しでも飢餓を減らすことができるなら私はもっと食品を大切にしていって計画的に食べ物を作るべきだと思う。

そして先日私はあるバラエティー番組を見て、Reduce Goというアプリがあることを知った。このアプリは近くのレストラン、飲食・小売店で余ってしまいそうな食品を、月額定額で受け取ることができるアプリで、こういった環境のためのアプリも増えていくといいと思った。

また、私は飢餓をゼロにするために日本全国の、賞味期限・消費期限が残り半月となった商品を集めて食料危機であるイエメンや南スーダンなどに寄付して飢餓ゼロをめざし、寄付する国を徐々に増やしていけば、まだ食べられる食品が不要に捨てられることも減り、飢餓も減少するのではないかと私は思う。

実際に私が考えたことが実行されると、食料を寄付された国の人たちは少しずつ元気を取り戻すというか、復活するというか、国全体が飢餓で悩まされることも無く、自給自足が少しずつでもできるのではないかと思う。

このような活動がすぐに実行されるほど簡単な問題ではないことは十分理解しているが、私たちのすききらいや、イベントなどで不要に処分される食品が少しでも飢餓で苦しんでいる国の助けになるのであれば、その年に大量に捨てられる食べ物を同じ地球で苦しんでいる人々に届けたいと私は思った。

そして私の小学生時代のように環境にも食べ物にも世界中の人々にも悪いことを極力して欲しくないと思った。

## 優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

### SDGs⑪:住み続けられるまちづくりを ～住み続けられるまちとは～

山口県立萩高等学校1年 市川 怜那(いちかわ れいな)

人がたくさんいて、建物がいっぱいあって、不自由がない。そういうまちは必然的によっぽどの事が無い限り残り続けるだろう。しかし、それが「住み続けられるまち」とイコールで結ばれるわけではないと思う。

私の夢は、建築設計士だ。物心ついた時から一度も揺らいでいない。勿論、家を設計したいという気持ちでこの夢を持ったが今は違う目的を持って夢を追っている。それは、地元のまちの活性化に協力することだ。きっかけは、中学二年生の時の職場体験学習である建築設計事務所へ行かせてもらった時にお世話になった、建築設計士さんに強い憧れを持ったことだ。その方は、まさに今、私達のまちの活性化に貢献をされている。「自分の好きな事で地域に貢献をしたい」という言葉が印象的で何度も頭の中でリピートされるほどだった。職場体験の中では、「自分が住みたい家」をテーマに設計図を描き、プレゼンテーションをするという活動を行った。私は、すぐに手を動かすことは出来なかった。そんな時に、「自分が好きな物、あったらいいなと思う物をどんどん描き出すと、つながっていくと思うよ」というアドバイスをいただいた。言われた通りに進めていくと、自然に私はペンを走らせていた。私が大事にしたのは「温かさ」だった。描いている際、なぜか家族の事を思い浮かべている自分がいた。「どんな風にしたらお父さん、お母さんは笑顔になるだろう」や「お兄ちゃん、妹はこんな感じが好きだろうな」という事ばかり。私は、プレゼンテーションで率直な思いを伝えた。建築設計士さんからは、良い評価をもらえてとても嬉しかった。その上、私はこの経験からあることに気づいた。地域を活性化させるには、ただ新しい建物をつくって、観光客を呼ぶ事が活性化させるという事ではないという事に。間違っていないが間違っているなと感じた。私が地域を活性化させるに、まず必要な事は、「温かさ」だと思う。そして、「温かさ」だけでは範囲が広すぎてしまうが、その中には、地域住民同士の助け合いなどの交流、細かく言うと、職場、学校での交流。さらに言うと、家族と結びつくだろう。人間にとって家族が一番大切だと私は思っている。

持続可能な開発な目標の中でも、「住み続けられるまちづくりを」は、私の目標と通じている。住み続けられるという事は、何かしら理由がある。環境が良いというのも大きいだろう。しかし、それだけでは住み続けられないだろう。特に、若い世代は人がたくさんいるまちへ行きたいと考えるはずだ。私も、そういう風な考えを否定できない部分もある。人が人を動かす偉大さを思い知らされることになる。しかし、これは「住み続けられるまちづくり」の大きなヒントでもあると思う。人に影響を与えるのが人ならば、その人を力にすればいいからだ。私が職場体験で学んだのも、職場の方の温かい目標に私は影響させられ、その「温かさ」こそが人にとって大切だという事。つまり、人の温かさがあれば人を動かすことができるのではないかと思う。具体的な方法はとなると正直、難題である。難しいと思ってしまうから難題になってしまっているのかもしれないが、一つだけ言えることはある。それは、しつこいようだが、人の温かさを大切にすることだと私は思う。やっぱり、人間誰しも、ふと温かさを求める事は絶対にあるはずだ。

私は、「住み続けられるまちづくり」ではなく「住み続けたいまちづくり」という風に、言葉のニュアンスを変えて、考えてみることにした。私が住み続けたいまちは、帰りたくなるまちでもある。例えば、ホームシックになったという事を聞いたりする。からかったりする人もいると思うが、私はどんな素敵な家なのだろうととても興味が湧く。きっと、居心地が良くて温かい家庭だから、帰りたくなるんだろうなど、勝手に想像までしてしまうこともある。ホームシックならぬタウンシックになるまちは。現実的なことを言えば、子どもの医療費が無料だったり、良い条例があるまちに人は集まってしまうと思う。だが、伝統的な祭や工芸品、特産物があったりとそのまちならではの特徴は、そのまちの温かさを大いに生み出すことができると思う。世の中、結局はお金、お金、お金だけど、つまらない理由で使ったお金で行われた事は、本当につまらない。どうせ、使うならば私は、「温かさ」をつくることのできる、価値あることに使ってほしい。

「住み続けられるまちづくり」を「温かさ」という材料を使って、実現していく事を、私は楽しみにしていきたい。そして、私自身も、温かい地域の活性化に貢献できるような人になりたい。その志を、忘れずに日々、精進していくつもりだ。

**特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)**  
**SDGs④:質の高い教育をみんなに**  
**～世界中の子どもが同じ教育を～**

高水高等学校1年 上杉 美優(うえすぎ みゆう)

私は、朝早く起きるのが苦手だ。毎朝、目覚まし時計の音が聞こえると憂鬱な気分になる。もっと寝たいのに、眠たくてしょうがないのに勉強なんてできるわけがない、勉強したくない。いつもこのようなことを考えながら学校に行く。でも、学校に着くと友達がいて、おもしろい先生もいて、学校に来て良かったなという気分になる。私は、毎日このようなことを繰り返しているのだから、これが当たり前だと思っていた。毎日、学校に行って、友だちと勉強して、家に帰る。これが普通なんだと思っていた。

しかし、ある日、テレビのコマーシャルを見て、そうではないことを知った。そのコマーシャルには女の子が映っていた。小学生くらいだから学校に通う年齢なのに、水を運んでいた。とても衝撃的なことだった。それから、学校やインターネットなどで世界には学校に通えない子どもたちがいることを知った。特に女の子が通えないことも知った。通わせてもらえない理由として、家の手伝いがあるから、両親も勉強をしてくれなかったのだから勉強が必要なものだと思っていなかったから、女の子が勉強をしなくてもいいからというものがある。

この話を聞くと、私はとても驚いたことを考えながら学校に行っているんだと思う。私は、勉強は好きではないが、必要なことだとは思っている。例えば、文字が読めないとその物がなにかわからない。なにかわからないままそれを口にすると死に至るかもしれない。他にも、けがをしたときの手当の方法を知っておかないと、菌が増え、けがをしたところがひどい事になるかもしれない。このようなことを避けるためには、やはり勉強が必要だと思う。勉強して危険なことを避けることができれば長生きができる。それは男の子も女の子も同じことだと思う。なので、私は、世界中の子どもが同じ質の高い教育を受けることが必要だと思った。

そのために、まずは、募金をすることから始めた。これが1番早く、私にもできる活動だと思ったからだ。私ができる募金の額は少なかったが、それでも少しでも届くといいなと思い募金した。他にも、世界の勉強のできない子どもたちの状況について、

もっと詳しく調べたりした。そうすると勉強ができないだけでなく、水すらきれいなものを飲めていないことを知った。今の私にできることはこれだけだが、大人になったら、もっと他の活動をしたいと思っている。私は、心理カウンセラーになりたいので、その職業をいかし、現地の子どもたちの話を聞けたらなと思っている。聞くことで子どもたちの悩みを解決できると思うし、勉強に対してどのような思いを抱いていて、どのくらい勉強がしたいのかということを知れると思う。それをもとに、さらに募金をしたり、私の教えられることがあれば、教えたりしたい。傷の手当てなら簡単に教えられて、これから役に立つことだと思うので、そういうことを教えていきたい。それに、両親に勉強の大切さを知ってもらい、学校に通いたいと思っている子どもが学校に通えるチャンスを増やしたい。でも、私ひとりが活動をしていると限度があるので、他の人にも、世界の子どもたちの状況を知らせていきたい。

今回の、この作文の、スローガンのようなものに「地球上誰一人として取り残さない (leave no one behind)」というものがある。私は、質の高い教育の面は、私の両親や先生方のおかげで取り残されていない。だから、勉強に対する思いが大切だとは思いますが好きではないというものだった。でも、もし私が質の高い教育を受けられない立場だったら、勉強ができることをうらやましく思っていたら。世界にも、勉強ができることをうらやましく思っている人がたくさんいると私は思っている。なので私は、もっと勉強ができることへの意識を変えていかなければならないと思っている。毎日、学校に通えて、友だちに会える幸せをきちんと実感していきたい。そして、勉強して知識を身につけられる幸せも実感していきたい。

私は、この作文を書くことで、質の高い教育を受ける以前に、教育を受けることが難しい子どもがいることを改めて知ることができた。いきなり、世界中の子どもたちが質の高い教育を受けるとなると、受けるための設備や、たくさんのことを教えてくれる先生を急いで準備しなければならないので、まずは、世界中のみんなが平等に教育を受けられるようにすると思う。そして、少しずつ質をあげていき、最後には世界中の子どもたちが質の高い教育が受けられたらいいなと思う。私ができることはほんのわずかなことしかないが、世界の子どもたちの状況を知っている今、できることは最大限にして、私と同じや私より年の離れた人みんなが同じように勉強ができるようになったらいいなと思う。



## 佳作

### SDGs①: 貧困をなくそう ～貧困をなくすために～

山口県立萩高等学校2年 小田 穂乃佳(おだ ほのか)

現代において、私たちにとって重要課題の一つである貧困。全世界で極度の貧困の中で暮らす人の数は、1990年の19億人から2015年の8億3600万人へと半分に減少したが、未だに多くの人々が貧困で苦しんでいる。8億人以上が今でも、一日1ドル25セント未満で暮らし、十分な食料やきれいな飲み水、衛生施設を利用できていない。貧困をなくすためには、まず私たちが貧困を身近に考え、一人ひとりが何をすべきか改めて見直す必要があると思う。

昨年の夏休み、私は語学研修でフィリピンのセブ島へ行った。行く前にセブ島について調べてみると、リゾート地、海がきれい、など良い印象ばかりだった。しかしセブ島に着いて、私は、小さい子どもがものを売って働いている、いわゆるストリートチルドレンや路上生活者を目にした。そのとき、私は初めて貧困の現実を知った。正直、すごく驚いたし、どうすればいいのか分からなくなった。今こうして自分がフィリピンに来て勉強していることに対して申し訳なくも感じた。貧困の中に生まれた子どもたちは、教育を受けることが難しい。そのことによって、将来の可能性をうばわれてしまう。私は、このとき貧困をなくさないといけない、あってはならないと改めて思った。

貧困をなくすために私たちができることと考えた時、最初に思いつくのは、寄付活動、募金活動だ。現在、貧困の解決のために活動している団体は何があるのかと思い、インターネットで調べてみると、生きるために働かざるを得ない子どもたちを継続的な支援で見守る活動を行っている団体、途上国で教育を受けられない生徒に、日本初の映像授業で学ぶチャンスを与える団体、危険な労働を強制されている子どもたちの権利を守る活動を行っている団体、などがあつた。たくさんの寄付先があつたが、知らない人も多くいるだろう。寄付活動、募金活動をしないとイケないと思っけていても知らなければできない。一人でも多くの人にこのような団体があることを知ってもらい、寄付、募金が積極的に行われるようになってほしい。

最近、洋服屋さんで「使わなくなった服はこのBOXに入れてください」のようなことが書かれた容器をよく見かける。これらの目的を調べると、世界中の服を必要とする人々へ届けたり、固形燃料などにリサイクルしているようだ。このことから、社会での貧困に対する意識が高まってきていることがわかる。私たちは、着たい服、好きな服を着たい時に好きなように着ることができる。しかし、貧困の中で暮らしている人たちは服も選ぶことができない。だから、もうこの服は着ないな、と思ったり、使えないなどと思っても、捨てる選択ではなく、リサイクルできないかなと考えるようにしてほしい。私もそうするようにしたい。

私が小学生の時、学校でペットボトルキャップの回収を行っていた。世界の途上国では予防できる感染症で命を落としたり、後遺症に苦しんだりしている子どもたちがたくさんいる。ワクチンさえあれば命が助かる子どもたちは、世界で一日に約6000人にも達しているようだ。この子どもたちを救う方法の最善策としてポリオワクチンの投与があげられる。ペットボトルキャップ860個でポリオワクチン一人分だそうだ。小学生だった私は、先生に回収したキャップの使い道を教えてもらってもあまりよく理解できていなかった。しかし、貧困について考えている今、改めてその重要さを感じた。ペットボトルキャップを回収していることを知らない人、知っていてもめんどくさいからといって分別せずそのままゴミ箱へ入れる人、多分まだそういう人はたくさんいると思うけど、ペットボトルのキャップで救える命があるということを頭に入れておいてほしい。

貧困をなくすために私たちができることを見直してみると、こんなにもたくさん見つかった。また、貧困の人を救うためにできることも分かった。私たちの貧困に対する知識や意識も高める必要がある。知らなければ、行動に移すこともできない。一人でも多くの人に自分の行動で救える力があることを知ってもらいたい。私も、今後生活していく上で、募金活動に積極的に参加したり、リサイクルできないか考えてみたり、ゴミの分別などを行っていきたいと思う。一日でも早く貧困で苦しんでいる人が助かる世の中になってほしい。

## 佳作

### SDGs⑭:海の豊かさを守ろう ～海の豊かさを守ろう～

山口県立萩高等学校1年 小林 ゆり (こばやし ゆり)

「持続可能な開発目標」、略して「SDGs」。2015年、国連サミットで掲げられた17の目標のうち14番目の目標「海の豊かさを守ろう」について、私は調べようと思う。

そもそも、どうして開発目標として「海の豊かさを守る」というものが挙げられているのだろうか。言うまでもなく、それは海に何らかの問題があるためだろう。そのことで私が思い出すのは、近年話題になっている「マイクロプラスチック」や海岸が埋めつくされるほどの大量の「海洋ごみ」のことだ。波によって私たちが容易に回収することができなくなってしまった小さな小さなプラスチックはずっと海に残るため、海を汚し、生き物たちの生態系への悪影響になってしまう。また遠くまで流されやすいため、どんどん影響が広がってしまうらしい。また、大量に海で漂う海洋ごみも大きな原因の一つだと思う。ニュースで見たあのごみだらけの海岸の映像を私は今でも鮮明に覚えている。また、ネットで調べたところ、「魚の乱獲による資源の減少や種族が絶滅の危機にある」といった問題も背景にあるようだ。

さて、このような深刻な問題を背景に示された目標のため、どのような対策がとられているのだろうか。先程挙げたマイクロプラスチックや海洋ごみの問題に重点を置いて調べると、様々な対策がとられていることが分かった。例えば、かの有名なコーヒーチェーン店ではプラスチック製のストローが廃止されることになった。またある株式会社ではプラスチックの代わりと成りうる環境に優しい素材の開発が進んでいるそうだ。世界にはプラスチック自体を使用禁止にしてしまった国もある。

そして、私たち個人にもできることはたくさんある。店に買物に行くときは、必ずエコバッグなどを持っていき、プラスチックの袋を使わないようにする。海岸や道端にごみなどを放り投げていかない。ボランティア清掃などで海をきれいにする……などできることはたくさんあるだろう。

だが、私はそれだけでは意味が無いのではないかと、思う。一部の人々や企業が一

生懸命海をきれいにしたり、流通量を減らしたとしても心ない人々がごみを海に流したら、ささやかな努力はすべて水の泡と化すのである。そんなことではいくら努力したところで海はごみが漂う、まさに「死の海」となってしまうだろう。

つまり、私が言いたいのは、SDGsについて深刻な海の状態についてもっと多くの人に強いメッセージを送るべきだと言うことだ。実際、私は高校生になって授業で初めてSDGsについて知ったのである。私の家族も「SDGsって何」と聞いてきたくらいだから、あまり多くの人に知られていないと考えても良いだろう。つまり国や政府が「海を守ろう、海を守ろう」と決めるだけでは、何も進展しないと思う。人々が今の深刻な状況を知ることは一番大事なことだと思う。

そして、私たちも問題について危機感を持ち、自分に少しでもできることはないか、魚たちを救う方法はないかと考える姿勢を常に持つておくべきだ。「ふーん。まあ、明日何もないなら、大丈夫じゃない？」という甘い考えの人がたくさんいるから、なかなかこの問題は解決しない、それどころか悪い方へ転がっていつてしまうのである。政府の発表していることに耳を傾け、自分も少しでもいいから考え、行動してみることが大事だと私は思う。

こうして思ってみれば、自分も将来を楽観的に見て、知ろうとも考えようともしてない人間の一人なんだなと感じた。「大変だなあ」と思いつつ、自分には関係のないことのように思っていた。だが、こうして調べ、海の現状を知り、考えることで、何ができるか考えるきっかけになった。

私たち人間が生き物のすみかを奪い生態系を破壊し、絶滅させてしまうようなことはあってはならないし、私たち自身も困るだろう。魚は獲れなくなるし、海は泳げないし、寿司は二度と食べられなくなるだろう。そのような凄惨な現実を引き起こさないためには、今の現状を知り、探求し、自分で考え行動を起こすことが必要であり、「海の豊かさを守ろう」という目標への一歩となるだろう。私も「SDGs」の目標達成に貢献できるような行動をしていきたい。

## 佳作

### SDGs⑭:海の豊かさを守ろう

#### ～海のために知るべき・すべきこと～

山口県立萩高等学校2年 廣兼 颯哉(ひろかね そうや)

私は、目標14である「海の豊かさ」について注目した。この問題は地球温暖化や海洋酸性化、漁業資源の乱獲など様々な要因から成り立っている。どの問題を見ても海に大きく傷をつける物である。海はその環境を通して人類はもちろん、森や空気・多くの生物に影響を与える。したがって海は地球の核であり、これからの「持続可能な社会」を達成していくためにも一番に解決すべきだと私は考える。今回は様々な要因の中でもマイクロプラスチックについて注目する。

私は科学部に所属しており、現在は部全体でマイクロプラスチックの研究している。研究は先輩たちが行っていたのもあったが、萩は海と近く、私自身も海の近くに住んでいたこともあり海と密接な関係にあった。よって小さな頃から海について興味があったため研究を始めた。また研究は萩高校だけではなく若狭高校の方とも協力して行っており、共同研究としても進んでいる。メールなどを通して情報交換をするのはもちろんだが、実際に顔を合わせたり互いの研究を発表し合うことでより良い刺激を受けていると私は感じている。

萩高校科学部では2つの分野に分け研究をしている。1つ目はマイクロプラスチックの生物に対する影響である。メランスポンジを染色しすり潰したもので溶液を作り、様々な濃度の溶液を用意した。これにゾウリムシを加え時間を置き、ゾウリムシを観察した。この研究はマイクロプラスチック自体が生物に与える影響を調べている。多くの影響はマイクロプラスチックは媒体として働き海を漂う化学物質になるものだとされている。したがってマイクロプラスチック自体が及ぼす影響は報告されておらず、人体には無害ともされている。私達は人に限らずほかの生物（微生物・植物など）にも目を向け、実際はどのような影響があるかを疑問に持ち自身の目で観察し証明をしようと研究を行っている。2つ目はマイクロプラスチックの海洋における分布である。様々な産地の乾燥いりこを用意し、煮て身を軟らかくして胃を取り出す。その胃をアルカリ性の溶液で溶かし、マイクロプラスチックを検出する。これをデー

夕に起こすことでどこの海域が多くマイクロプラスチックが存在しているか、またマイクロプラスチックが排出されている場所をつき止めることで今以上の排出を防ぐなどを目的として研究を行っている。この2つの研究はどちらもまだ十分な量のデータを集めることができていない。したがって十分な結果も見られていないが、実験方法の確立を始めとし、これからも研究を続けていこうと思う。またこれらの活動の発表の場として「International micro plastics youth conference 2019 海と日本」に参加した。この会議では日本のみならず、アジアを中心とし様々な国が参加し交流を深めた。この会議を通して研究の進歩はもちろんだが、世界の現状や意見を実際に聞くことでよりこの問題の危険性を身近に感じる事ができた。また世界各国の研究者と繋がり共に研究・勉強し合うことで自身のほんの小さな好奇心から生まれた物が、少しでも世界の役に立てると考えると自身の成長をより強く感じる事ができた。

色々な活動・経験を通して私が今一番に思うことは「このままでは何も変わらない」だ。マイクロプラスチックに限らず、海を守るため多くの研究者・お金・資源が日々動いている。それにより原因を突き止めたり対策が可能になるのも確かだ。しかし日が経つごとにメディアや政府・研究者は世界の人々に強く問題を主張する。これは多くの研究の成果が解決とは結び付かないためであり、研究者としてではなく実行者としても役割を持つ私達が無知であるからと私は考える。地球温暖化や温室効果ガス・マイクロプラスチックが危ないと知る人は多くいる。しかし日常の中で何気なく行う歯磨きが海を汚染すると知る人は多くはいない。このように問題の現状や解決すべき課題を知っても私達は知ることに満足し、便利さや日常には疑問を持たず自身の役割を理解しようと果たそうとはしない。私達が行動しなければならないと知らないのである。したがって私は研究することも重要だがその成果と結果が結びつくよう私達が何をすべきかを発信する役割を担いたいと考えている。

「持続可能な社会」を達成するため、これ以上の発展が汚点へとならないためにも地球市民の一員としてこれからも活動を続けていこうと思う。

## 佳作

### SDGs③:すべての人に健康と福祉を ～誰かの心の支えになりたい～

山口県立萩高等学校1年 弘中 竜也(ひろなか たつや)

僕は、この夏に初めてSDGs（持続可能な開発目標）について知りました。僕のようにこの2016年～2030年までの国際目標を知らない人たちが大勢いるはずです。その中で、目標を達成するのは難しい事だと思います。しかし、無意識のうちに常識となりつつある目標も多数あることを知りました。その中で僕は健康と福祉について述べたいと思います。

現在、日本は少子高齢化が急激に発達しています。これは多くの人々が知る通り、医療技術の向上による死亡率の減少と、女性の社会進出などによる未婚率の増加が原因と考えられます。行政の話し合いでもこの少子高齢化についてはよく話題に挙がっているように思われます。日本では対策として地方自治体による育児環境の整備、企業による結婚を促すサービスなどが現在行われています。このような福祉の活動は、最近の先進国では当たり前のように広がっています。では、先進国のみがサービスの充実した暮らしを求めていけばいいのでしょうか。それは違うと僕は思います。発展途上国も先進国と同じように幸福を追求しているはずです。しかし、それらの国にとって、現状では国内の小さな問題を解決することさえままならないのです。ユニセフの発表によると2012年の一年間に五歳未満で死亡した子供は、推定で約660万人にも及び、いまなお毎日18000人、五秒にひとりの幼い命が失われているそうです。その多くが途上国に産まれた子供であり、健康を害する環境で育ったため亡くなっていきました。これから先、様々な可能性を秘めた命が環境のせいで失われていくのはおかしなことです。なぜ、先進国が途上国の民間人の健康や福祉サービスの拡張に力を尽くし切ってあげられなかったのでしょうか。僕も先進国に産まれた身でありながらユニセフの発表は何もしてこなかった自分の無力さを感じさせられる内容でした。きっと発表された当時の人たちもこのままではいけないと考えたのでしょうか。途上国では現在、他国からの技術の伝承、医療や勉学、住生活や食生活で、NPOや政府から派遣された方々がサポートをしています。無償でのサービス提供、この取り組み

がより広がれば、全人類が健康と福祉を得られるはずです。僕ら学生は今、エネルギーに満ちているのに、自分のことでいっぱいになっています。けれど、本当は自分に甘いところがあって自己中心的にそう考えてしまうのです。

先進国もそういう姿勢だったのではと思います。自分の国に利がないことには全く興味を持たない、それでいて検討中だとはぐらかす。そんな人間の弱い部分が社会的に現れた結果、見て見ぬ振りをした結果、一人、また一人、未来が奪われてきました。

もしもそれがあなたの親戚だったら、親友だったら、親だったら、好きなひとだったら、あなただったらどうでしょう。辞書にある言葉で表せない深い絶望にとらわれるでしょう。それが自分にとって特別な人であればあるほど気持ちは強く、激しくなるでしょう。それがあなたに関わりのない人だとしても同じことです。どこかで深く傷つく人がいます。この地球上には、自分以外の人間が何億といます。気持ちを表に出せる人、表に出せなくて顔がこわばってしまう人、表に出せなくても感情を押し殺して笑顔を作る人。「助けて」ということは人によって難しいこともあります。だからこそ笑顔で手を差し出してくれる相手を必要とするときもあります。求めたって届かないこともあります。だからこそ無償の愛が世界に求められています。無償の愛とは、サービス精神です。誰かの健康の支えになる。あなたも誰かの心の支えになってみませんか。



## 佳作

### SDGs①: 貧困をなくそう ～私達にできること～

山口県立萩高等学校1年 古谷 菜子(ふるや まこ)

貧困とは何か。私が想像する貧困と、私の普段の生活はかけ離れている。ぼんやりとしたイメージだけでも、世界の貧困問題は規模が大きいことがわかる。「貧困をなくそう」言葉では簡単そうに聞こえるが、実はもの凄く難解な目標だと感じた。

私が考える貧困の状態は、アフリカをはじめとした発展途上国で起こる、衣食住をともなわないまま人々が暮らしている状態のことだ。歴史的な背景や、他国との貧富の差も原因の一つだと思った。

英語の課外の時間に班それぞれで課題について調べ、プレゼンすることになった。私の班に与えられたのは「子供の貧困について」という課題だった。世界の子供の食事面と教育面を中心に、貧困について調べることになった。話し合う中で、貧困の定義の違いに気が付いた。私の貧困は普通の生活が出来ない状態のことで、友達の貧困は金銭が十分でないことだった。基準を統一するため、UNDP（国連開発計画）の「教育、仕事、食料、保健医療、飲料水、住居、エネルギーなど最も基本的な物・サービスを手に入れられない状態のこと」を貧困の定義としたが、きっとこの定義は、価値観や国籍、生活環境によって少しずつ異なるものだと思う。

なぜ、世界の子供達が貧困に苦しめられているのか、解決のための対策、課題にはどんなことがあるのかを調べていくうちに、様々なことを知った。世界の多くの子供達が学校に通えていないこと、通うことが出来るようになっても、教育の質が向上しておらず、満足のいく学習が行えないこと、年間で多くの子供が餓死していることなど、対策によって対処され続けているにも関わらず、いまだに多くの問題が山積みになっている。特に心に強く残っているのは、子供達が餓死から逃れるために親の仕事を手伝う、手伝うことによって学校に通うことが出来なくなる、学校に通っていないため、教育を受けておらず、職に就けないまま餓死してしまうという、負の連鎖だ。子供達は生きなければならない。生きるために教育を捨てる。捨てたことによって生きる術を失う。このままではずっとこの連鎖から抜け出すことはできない。貧困な国

の現状がここまでとは、思わなかった。当たり前のように家、食べ物があり、学校に通い、仕事に就く、私達の生活とはあまりにも違いすぎていると感じた。彼らは子供の頃から労働が当たり前で、学校に通いたくても、生きるために諦めることを強いられている。私は今高校一年生の十五歳だ。小学校に入学してから今までの約九年間、そしてこの先も、労働し続けるなんて考えられない。私達にとって大前提である生きるということが、彼らにとっては大きな壁となっていると思った。様々な問題が、壁を乗り越える障害となってしまっている。あまりに残酷で、壁を乗り越えることが出来ずに、力尽きてしまう子供達が多くいるという現実には強い悲しみを感じた。

改めて貧困問題について調べてみて、私が感じたのは、問題を解決するためには、他国からの今以上の支援の充実、子供達の教育を普及させるという二つの課題を達成しなければならないということだ。発展途上国をはじめとする貧困問題に悩まされている国が、今の状態から脱することのできない理由は、圧倒的な資金不足と、教育の質の低迷にあると思う。教育が十分でないまま国の未来を背負ったとしても、現状の改善に繋がらない。TF Tプログラムが行っている対策として、子供達に給食を設けることで、教育を受け、知識をつける。併せて地元農家との連携を行い貧困の解消に貢献するというものがある。問題の解決には、やはり次の世代への継続的な支援が不可欠なのだと感じた。また、給食提供によって、家事や両親の手伝いで学校へ通えなかった子供達も学校に来るようになったそうだ。子供達への教育が普及されていくことが、貧困から脱するための手口となっていくのだと思う。

SDGsの開発目標は、2030年までに達成することを目標としている。10年後、今学校に通う子供達が、大人となったときに国はどう変わっているのか。ゴール達成のために、今から動くことが必要である。未来を担う、今を生きる子供達のため、また平和に過ごすことのできる未来を創るため、私達が、これからもずっと、支え続けなければならない。

## 2019年度募集要項

### 第59回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

#### ■テーマ

作文の題目は、「①災害に強い街づくりのために、私たちが国際社会と共にできること。」、「②性別に関係なく、一人ひとりが輝く国際社会の実現に向けて自分には何ができるか。」又は「③違う価値観を持つ人たちと共存するためにどうすべきか。」のうちいずれか一つとします。

なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通し、国際連合について述べたものとします。

#### ■応募資格

県内在住又は在学の中学校生徒または左記に準ずる在日学校在学学生

#### ■原稿制限

400字詰め原稿用紙4枚以内

#### ■賞

特賞：2名、優秀賞：2名、特別賞：1名、佳作：5名

### 第1回「高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト」

#### ■テーマ

題は自由。作文の内容は、持続可能な開発目標（SDGs）のうち、いずれか一つを選択し、選択した開発目標について、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などについてものとします。

#### 持続可能な開発目標（SDGs）

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標

①貧困をなくそう ②飢餓をゼロに ③すべての人に健康と福祉を ④質の高い教育をみんなに ⑤ジェンダー平等を実現しよう ⑥安全な水とトイレを世界中に ⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに ⑧働きがいも経済成長も ⑨産業と技術革新の基盤をつくろう ⑩人や国の不平等をなくそう ⑪住み続けられるまちづくりを ⑫つくる責任つかう責任 ⑬気候変動に具体的な対策を ⑭海の豊かさを守ろう ⑮陸の豊かさを守ろう ⑯平和と公正をすべての人に ⑰パートナーシップで目標を達成しよう

#### ■応募資格

県内在住又は在学の高等学校生徒（全日制、定時制、通信制）、高等専門学校生徒（ただし、3年生まで）

#### ■原稿制限

400字詰め原稿用紙5枚以内

#### ■賞

特賞：2名、優秀賞：2名、特別賞：1名、佳作：5名

### 共通事項

#### ■締切 ■審査と発表

令和元年9月5日(木)必着 主催団体において審査し、10月下旬に入選者に連絡します。

#### ■応募作品の取り扱い

①応募作品は返却しません。②入賞作品の著作権は、主催団体に帰属します。③作品は自作・未発表のものに限ります。④中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。

#### ■個人情報について

応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。

#### ■応募先・お問い合わせ先

〒753-8501 山口市滝町1-1 山口県観光スポーツ文化国際課内

日本国際連合協会山口県本部 TEL 083-933-2340

<http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

令和元年12月発行

発行元

日本国際連合協会山口県本部

〒753-8501 山口市滝町1-1

山口県観光スポーツ文化部国際課内

TEL (083) 933-2340



日本国際連合協会山口県本部